

まんたら通信

第143号 (通巻175号)

平成20年(2008)05月 佛誕2574年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
URL <http://www.awa.or.jp/home/ryusho/>
E-mail ryusho@awa.or.jp

お大師さまに会うまで

私には保田龍秀という兄弟子がいま
した。

と言つても、大東亜戦争末期の昭和
十九年十一月十七日、フィリピンのレ
イテ島で小隊長として作戦中に戦死し
ましたから、会ったことはありません。

余談ですが、レイテ島といえば大岡
昇平さんの大著『レイテ戦記』が有名
ですが、この中で「レイテ島の攻防は、
戦略上必要がなかったにもかかわらず、
緒戦で敗れたマッカーサーの単なる意
地と、日本軍指導部の無能によって、
日本軍八万人以上、米軍数千人の、失
わずにすんだ筈の若い命を失うという
悲惨な結果となった。」という意味のこ
とを書いていきますね。

この戦闘ではまた、食料弾薬を断た
れ、飢えに苛まれながら敗走する、と
いう意味でも、悲惨な結果をもたらし
ました。

この『レイテ戦記』に保田少尉につ
いての記述があります。

密林の小川でカニをとった部下が、



「小隊長どの、これを食べて下さい」と
差し出した時「私は坊主で殺生は苦手
だから、貴様たちが食べるように。」と
押し返したという話です。

かけがえのない愛弟子を失ったこと
で、後に私の師僧となる、時の住職で
高齡の龍岳和尚の嘆きは如何ばかり
だったでしょう。

そのような時「そう言えば、満州で
家族を無くした生き残りの子が、すぐ
近くにいますよ。」と、世話人さんの誰か
が言ったのでしょうか。

「お寺で弟子を探しているけど、行っ
てみるか。」と父親の実家から話があり
ました。お寺など、どんなところか皆
目見当もつきませんでした。上の学
校へ行かせてくれるそうだと、のひと言
が決め手でした。

尤もその年の秋、体調を崩した師僧
は翌昭和二七年春に亡くなり、少しで
も早くお坊さんの資格を取らなければ
檀家が困るということになって、「上
の学校」は空手形になりましたが。

こうして振り返ると、人の運命とか
縁などというものはまことに不思議な

一昨年9月号で一度ご紹介しました。
杉並にお住まいの仏画家、田治見美代子
さんが額に入れて奉納して下さった弘法大師
像です。縦62㌢、横52㌢。
印刷機の関係で、色が原画と微妙に違いま
すしガラスの反射もありますが、暖かなお
心が伝わってきます。

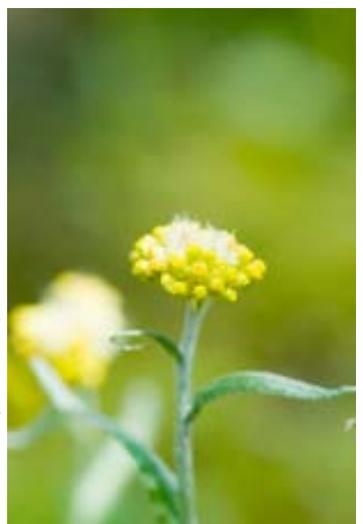
京都市立芸術大学名誉教授で、文化
勲章受章者の梅原猛先生は、レオナル
ド・ダ・ヴィンチと肩を並べるほどの
天才、と称賛したそうですね、
土木・薬学・芸術の業績のどれを
とつてもその通りと思えますが、私た
ちの受け取り方は、所謂偉い人になり
がちに遙かに遠いお方ではなく、いつ
でも気軽に愚痴を聞いてくれる人、親
身になって励ましてくれる人ですね、
だから、あれから千二百年余り『お
四国』や高野山に日本中の人たちが惹
きつけられるのだと思います。

余 滴

◆ふれあいコンサートのお知らせ
です。お馴染、館山市のふるさと
大使、深津純子さんが新しいCD
の発表を記念してのライブです。
5月24日(土)午後6時30分開
演。
深津純子(フルート)、奥山勝(ピ
アノ)、越田太郎丸(ギター) 小泉
哲夫(ベース) 美座良彦(パーカッ
ション)。会場整理費は3,000円
です。
お申し込みは0470-38-4740(紫
雲寺)又はホームページからメー
ルも出来ます。
例年と違い、今回は気の合った同
志の豪華メンバーです。

どなたもお聞き逃しのないよう
早めにご連絡下さい。お待ちしております。
◆それにしても、もう既に5月。
お大師さまとのお縁が、それほ
ど“有り難い”と承知しているの
なら、もう少しシャッキリすればい
いは分かっている筈なんです
が・・・実際はなかなかと言うと
ころで。
暖かくなったり、今朝のように
急に季節が1ヶ月も逆戻りしたり
で、身体の方が付いて行きません。
◆去年、山門の鬼瓦の中にミツバ
チが住み着いて、毎日楽しみに見
ていたところ、夏の暑さに堪りか
ねて、逃げ出しました。

ところが先月末、余程拘りがあ
るのかまたやって来て、せつせと
働き始めました。
なにを考えているのやら。
他に手作りの巣箱にもやって
きてくれて、こちらは順調です。
ニホンミツバチはおとなしい
ので、すぐそばで眺めていても
襲ってこないのです。◆今月の
野草はハハコグサ(母子草)キク
科ホウコグサ属。ホウコグサが
正しいのだそうです。茎や葉に
細かい毛があって、ほうけ立っ
ているからとか。春の七草のゴ
ギョウ(オギョウ)
2008/04/09 龍渉



末は博士か大将か

相変わらず、嫌な事件が続きますが、特に若い人が起こした事件を見えます、「無職」という人が多いですね。

不景気だから仕事がない。仕事がないから、金がない。金がないから生活が苦しい。将来が不安。やけくそになる。事件を起こす。この繰り返し。または、やりたい仕事がない。

家にいる。親から働けと言われる。しかし、金がないからアルバイトをする。やりたい仕事じゃないから、長く続かない。また家にいる。親から叱られる。金はない。便所の火事でやけくそだ……。

今日は、そんな若い人に、ぜひ聞いていただきたい話したいと思います。

岩手県の住田町という田舎町に、寛ちゃんという高校生がいました。この寛ちゃん、学校ではテニスの選手としてかなり活躍していたのですが、家が貧しいので大学には行けず、就職することになりました。とは言っても、そんな田舎で仕事などありません。そこで考えたのが食いつばぐれのない仕事。なんだと思います？ 鮭屋の見習いです。住み込みで働けば、最低限、食うことには困らないと考えたわけです。

しかし、地元には鮭屋などありません。知り合いを頼って、宮城県の仙台までやってきます。そして、仙台では一流と言われている鮭屋になんとかして入り込みます。もちろん、いちばんベーパーですから、鮭など握らせてくれませんが、先輩たちにはここまでやるかというほどいじめぬかれま

す。それでも運動部で鍛えた根性だけで、耐えに耐えました。しかし、二年経って、漸く巻物が出るようになったとき、どういうわけか、突然、主人の一声で首になってしまいました。いま思えば、鮭屋の経営上の問題だったかも知れません。

体のいいリストラです。

寛ちゃん、ここで考えました。このまま地元に戻ったところで仕事がない。悩みに悩みました。仕事がない。金がない。金がないから生活が苦しい。将来は真つ暗。やけくそになる……という境目でした。

そのとき、お父さんがその昔、寛ちゃんに言ったひと言を思い出したので。 「寛、鮭屋はなんて言ったって、東京の銀座だ」

寛ちゃんは、持っていたお金で東京までの切符を買いました。残ったお金は、十円玉ひとつだけ。それを大事にポケットに入れて、上野駅に着いたのは、夜でした。もちろん、泊まる場所がありません。寛ちゃんは、折からの木枯しを避けるがごとく、駅前の公衆電話ボックスの中に入り、朝の来るのを待っていました。

ふと見ると、古新聞があります。誰かが電話をかけた後、捨てていたのでしよう。寛ちゃんはその新聞を広げ、鮭屋の見習いを募集している案内を見つけました。ポケットを探ると、大事にしまつてあった十円玉が出てきました。寛ちゃんはその十円玉で、新聞にあった銀座の鮭屋に電話を入れました。三分間の勝負でした。

「また、かけてくれ」と言われたらおしまいです。最後の十円だからです。

願いは通じました。「明日、午前中、仕込みの頃に来い」と言われたのです。その晩、電話ボックスで夜を明かした寛ちゃんは、人に道を聞きながら、初めての銀座をさまよいつながら、ようやくその鮭屋を見つけました。

すると、「いま、親方はいないから、夜、出直してきてくれ」とのこと。寛ちゃんはおうフラフラでした。仙台を出てから、食事をしていないからです。公園の水を飲み、ペン手に涙を下ろしたまま夜を待つて、再び出かけて行きました。

「おう、朝きた兄ちゃんか、よく来たな。だ

いたい、どいつもこいつも一度断つたら、二度と来ないもんだ。いい根性してるじやねえか。雇ってやるよ」

鮭屋の親方は、朝も店にいたのです。でも、わざとしないふりをして、仕事を探してきた若者が本当に勤める気があるかないか試していたのです。

その晩から、寛ちゃんはフラフラになりながら働きました。仕事が終わり、与えられた部屋の棚の上に残っていた一枚のせんべいを発見し、口に入れたときのおいしさは、いまだに忘れられないと寛ちゃんは言います。

寛ちゃんの修業は、ここからまた始まりました。それからしばらくして、故郷の友達から手紙が届きました。その友達は、勉強がとでもできて、東北大学の医学部に進んでいました。寛ちゃんは彼をよく知っていました。彼の家庭は寛ちゃんの家など比べ物にならないくらい貧しい家で、いつも汚い格好をしていたので、高校時代、みんなにいじめられていた子だということ。

寛ちゃんは何度も彼がいじめられているところを助けてあげたものでした。彼にとつては寛ちゃんだけが友達だったので。その彼からの手紙です。中を開けると「どうしても医学の参考書が買えない。必ず返すから五千円、貸してくれ」という切々とした文面でした。

寛ちゃんは最初の給料の殆どを彼に送りました。へたくそな字でこう書き添えて、「お前は医者になれ。立派な医者になって、おれたちの町に戻ってこい。俺も頑張るかな」

いま、寛ちゃんは東京・西麻布の『鮭寛』のオーナー兼職人です。お客さんは歌舞伎役者から文化人までひっきりなしに訪れます、私は寛ちゃんに聞きました。

「それで、その友達は怎么样了？」

「ああ、大学で教授になってくれと言われ

るくらいの名医なのに、俺との約束を守って、いま町医者をやっているよ。俺の両親を大事にしてくれてさ、うれしいよ」

貧しさに負けなかった元少年の笑顔がそこにありました。

につぼん人情小噺 第二十九話

月刊誌、MOKUの5月号からの転載です。お書きになった三遊亭鳳豊さんは、お名前からわかる通り噺家さんです。

三遊亭円楽の一番弟子、鳳楽さんのお弟子。「落語界から直木賞を」がモットーだそうです。

毎月、この雑誌にほのぼのと心温まる、元氣が出るお話を連載しています。

世のため人のためには、ねばならぬという「正論」も勿論大事ですが、時にはこういうお話も宜しいかと。